

忘れもしない衝撃的な経験、「しびれる」という発見に出会った大学院時代。たまらなかつたです。

大学院時代は、衝撃的な経験に出会いました。今の研究スタイルとなったわけですから。その面白さを教えてくれるきっかけになったのが正宗先生でした。

先生は当時、大豆に虫がつかない生物農薬を開発するため、札幌ドーム6個分くらいの広い敷地を活用し、壮大な研究を展開していました。研究補助のため、毎日土木作業員のような生活でした(笑)。

正宗先生から博士1年目に、海藻の合成について研究指示を受けました。ただ、最初にイメージした手順で研究結果を得られず苦しみました。やがて物質生成の結果が出ましたが、今度はその物質が抽出の際なぜか消えてしまいました。

「なぜ物質はできているのに抽出の際なくなってしまうのか。抽出する際流れ出て、物質は水道管のトラップにたまっているのでは。」

その仮説が的中し、そこから成果物質が出た時に、私は人生で初めて「しびれる」という感覚を得ました。

意外にも結果は偶然の産物。世界で誰もやっていなかった独自の研究成果を得たのです。

新しい研究体制による、新たなスタートへのステップ。青森のための研究に全力をつくそうと思いました。

大学院卒業後、カナダのUBC(ブリティッシュコロンビア大学)でがんの特効薬合成グループに所属しました。世界各国の研究者との関わりも経験できました。

帰国後は母校弘前大学医学部に戻り、糖質科学研究のため、外部との接触もせずただただ研究に没頭しました。外部との関わりは夕方に会うお医者さんぐらいだったかな(笑)。

やがて、青森県産業開発技術センターの開設により要請を受け異動しました。地域資源をテーマに産・官・学の研究体制を確立するため、プロジェクトを立ち上げるというもので、当時40歳で開発部長を務めました。

大手企業や研究者と新しい研究体制をつくるため、たくさんの方を訪問しました。

全国一の短命県、経済力の弱さが指摘される青森県。この課題解決に向け、地域資源の生理機能と機能性成分を解明する研究を続けていくことと思いました。



カナダのUBCでがんの特効薬解明グループに所属していた頃



そして本学へ。研究の喜び、皆様への感謝でいっぱいです。

研究への思いを胸に、平成15年、大学院立上げに際し本学へ異動。今までの自分の経験を活かすこと、つまり、学術的価値の創出のみならず、有益な機能性を地域住民の健康に役立て、それを付加した地域産業の振興を図る研究ができることに、喜びを感じるようになりました。

また、大学・大学院の一貫した教育システム構築に、研究科長として携わることもできました。振り返れば、北海道大学院からスタートして、42年間研究開発に携わり、様々なしびれる発見に偶然出会えたことは、人生で関わった多くの皆様のおかげだと感謝しております。

また、未来を担う学生のみなさんには、何にでも一所懸命に取り組んでいただき、関わった人を大切に、それぞれの職場をよくしてほしいと心より願っています。改めて感謝申し上げます。本当にありがとうございました。



- 【プロフィール】 松江 一 (まつえはじめ)。青森鶴田町出身。
- 1975年 北海道大学大学院理学研究科博士課程修了
  - 1974-1975年 日本学術振興会奨励研究員
  - 1975-1976年 カナダUBC(ブリティッシュコロンビア大学) 博士研究員
  - 1976-1987年 弘前大学医学部助手・講師・助教授
  - 1987-1998年 青森県商工労働部商工政策課主幹
  - 1988-2003年 青森県産業開発センター開発部長
  - 2003-2012年 青森県立保健大学 学部・大学院教授、現健康科学研究科長

【功績】

平成23年度遠藤賞受賞。研究テーマ「地域資源に含まれる糖質の探索と生理機能の研究」地域の健康づくりと産業づくりを目指し、地域食資源の有益な機能性を地域住民の健康に役立てることで、その機能性を付加価値とした地域産業の振興を図るため、地域食資源に含まれる糖質の探索および生理機能、機能性成分の解明をテーマに取り組み、製品化まで一貫したサポートを実践、精進してきた功績が評価されました。

